

氏名(本籍)	植 <sup>うえ</sup> 田 <sup>だ</sup> 誠 <sup>せい</sup> 治 <sup>じ</sup> (兵庫県)
学位の種類	博士(医学)
学位記番号	博甲第3473号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	医学研究科
学位論文題目	<b>Self-esteem and Smoking, Drinking and Drug Use in Japanese High School Students</b> (日本の高校生におけるセルフ・エスティームと喫煙, 飲酒, 薬物使用)
主査	筑波大学教授 博士(医学) 大久保 一郎
副査	筑波大学教授 博士(医学) 江守 陽子
副査	筑波大学教授 医学博士 中谷 陽二
副査	筑波大学助教授 医学博士 佐藤 親次
副査	筑波大学助教授 博士(学術) 高橋 秀人

## 論文の内容の要旨

### (目的)

日本の学齢期におけるセルフ・エスティームと喫煙・飲酒・薬物使用との関連については、セルフ・エスティームとシンナーなどの薬物使用には関連がないとする報告と薬物乱用者のセルフ・エスティームが高いという報告のみであり、ほとんど明らかになっていない。そのため本研究では、高校生を対象とする調査に使用可能なセルフ・エスティーム測定尺度を開発したうえで、日本の高校生におけるセルフ・エスティームと喫煙・飲酒・薬物使用との関連を明らかにすることを目的とした。

### (対象と方法)

本研究ではセルフ・エスティームを測定するために、まず Rosenberg のセルフ・エスティーム測定尺度の日本語版を開発した。開発にあたっては、高校1, 2年生176名を対象に、再検査法ならびに比較尺度と比較する方法を用い、その信頼性と妥当性を検討した。喫煙・飲酒・薬物使用については、先行研究を参考に喫煙・飲酒・薬物使用の現状と将来の喫煙・飲酒・薬物使用意志について質問する調査票を開発した。調査は7都道府県の23の高校1, 2年生、2564名を対象とし、調査票は各学校の保健体育授業担当者もしくは学級担任を通じて配布した。本調査は未成年者の喫煙・飲酒・薬物使用という法律によって禁止されている行動をたずねるものであるため無記名とし、調査対象者それぞれに、調査票とともに密封可能なシール付き封筒を配布し、記入後調査票を各自で密封させたうえ回収する等の特別な配慮を行った。

### (結果)

男子のセルフ・エスティームと喫煙に関連が認められた。非喫煙者、試喫煙者(喫煙を試したことのある者)、喫煙者の順にセルフ・エスティームの平均得点は、24.7, 24.6, 23.4であり、傾向分析の結果、非喫煙者と喫煙者の差、試喫煙者と喫煙者の差は有意であった(共に $P<0.05$ )。また、男子において試喫煙者のう

ち、将来の喫煙意志のない者のセルフ・エスティームの平均得点は24.8、喫煙意志のある者は23.4であり、将来喫煙意志のない者のセルフ・エスティームが高かった ( $P<0.001$ )。一方で、女子のセルフ・エスティームと喫煙とは関連が認められなかった。また、セルフ・エスティームと飲酒、薬物使用については、男女とも関連が認められなかった。

#### (考察)

セルフ・エスティームが日本の高校生男子の喫煙に関連する要因の一つと指摘できる。喫煙者のセルフ・エスティームが低く、非喫煙者のセルフ・エスティームが高いという結果は Bonaguro らや Semmer らの研究と、また非喫煙者、試喫煙者、喫煙者の順にセルフ・エスティームが低くなるという結果は、Murphy らの研究と同様の傾向がある。

男子において、喫煙を試したことのある者のうち将来喫煙意志のない者のほうが、意志のある者よりセルフ・エスティームが高かった。このことは将来の喫煙行動を予防するという観点から特に注目すべきである。McCaul らや Pederson らなどの縦断的研究の結果と考え合わせると、たとえ高校生以前に喫煙を試したとしても、もしセルフ・エスティームが高ければ、将来の喫煙意志を持たず、将来喫煙行動をとらないという可能性が指摘できる。高校生の時期あるいはその前の中学生の時期は、喫煙の誘惑を受けやすい時期でもあり、この時期に高いセルフ・エスティームを高める教育を行うことの、喫煙防止に対する意義が示唆された。

Semmer らは、セルフ・エスティームと喫煙との関連は男子より女子に強く認められると報告しているが、本研究では女子においては、関連が認められなかった。また、セルフ・エスティームと飲酒、薬物使用については、男女とも関連が認められなかった。これらは、欧米の研究結果とはやや異なる特徴と指摘できる。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

高校生の喫煙・飲酒・薬物使用の防止は、わが国の健康教育分野における重要な課題であり、効果的な喫煙・飲酒・薬物使用防止教育プログラムを開発することが求められている。本研究はこれらの使用とセルフ・エスティームとの関連を分析したものであり、その結果、喫煙に関しては男子ではセルフ・エスティームとの関連が認められ、女子では認められなかった。また、飲酒及び薬物使用に関しては男女ともセルフ・エスティームとの関連が認められなかった。これらの結果から、日本の高校生においては、男子の喫煙を防止するうえで、セルフ・エスティームを高めることが示唆され、思春期の健康づくり対策及び喫煙対策にとって、意義の高い論文である。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。